

### (3) 市場流通は過去の遺物か

東京中央卸売市場での野菜市況は夏 8 月以降続落して、10 月の平均価格は ¥177-と平成 19 年 6 月以来のキ口あたり ¥200-台を割り込んだと報じられています。昨年来の不況で果物市況の低迷が深刻化してきたなかで、持ちこたえていた野菜相場も景気低迷の荒波をモロに被るようになって来たのでしょうか。多くの品目が夏秋産地から秋冬産地への切り換え時に、天候条件によるツナギが上手くいかなかた為の数量バランスが崩れたとか、気温変化による商材提案が中途半端になったなど短期的な原因は見出すことが出来ますが、それが全てとは言えない面も感じられます。

卸売単価が高騰してもスーパーなど小売り店頭価格には影響を与えないばかりか、逆に安くなっている場面さえも見られることが屢々あります。かつて卸売市場で形成された価格は、産地支払価格は勿論のこと、市場取引以降の末端小売りに至るまでの基準として認められたものでした。しかし、流通の多様化と呼ばれいわゆる市場外流通が進展するに従い、夫々のルートごとに形成される価格は市場卸価格とは無関係に形成され、市場価格は指標にされるどころか全く無視される場面もみられるようになって来ています。

市場流通は青果物の単品大量生産・大量消費の時にはその評価は大なるものがありました。今日の流通に係わる話題の中では、作る側と食べる側との距離を遠ざけるとして否定的な見方をされることも目立っています。市場経由率の低落傾向をみても頷ける部分であり、50%を割り込んだままの果実などは退場を余儀なくされるやも知れませんか。小売りのバイイング・パワーに圧されて主導権を失いつつある市場流通の前途はいかばかりかを改めて考え直さなければならぬと思います。

先日の TV で、13,000 店を越える産地直売所の盛況が、関わる農家の意識を変え、農協の在り方や考え方までも変えさせ始めたと報じていました。求められる農産物を生産し、販売する作業に従事することから儲かる農業に目覚めたと言えるでしょうし、規模の大小は別にして食と農との関係を改めて理解し合うことに大いに力となったことでしょう。そういう点からみれば、市場流通の本旨を巧まざるものとして実践していると言えましょう。それは同時に市場流通に係わる関係者が見失ってきたことを改めて反芻する機会を与えてくれたものと思います。最も身近な産地の良きパートナー、それが卸売市場だからです。

(鈴木重雄筆)